



「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861  
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 加藤 誠  
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe) とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 和解の現場に立ち会う

佐々木 和之  
ささき かずゆき

皆様こんにちは！ この11月、卒業生を連れて一時帰国いたします。  
報告・講演会でお目にかかれることを楽しみにしています！

### PIASSの卒業式

昨日10月26日、私の活動の拠点であるプロテスタント人文社会科学大学（Protestant Institute of Arts and Social Sciences、略称PIASS）で卒業式がありました。平和紛争研究学科の今年の卒業生は10名。卒業後、PIASSの「持続可能な平和と開発のための研究・行動センター」（以下、「平和と開発センター」）への就職が決まったフロリアン・ニュンゲコさんは首席での卒業でした。

今から4年前、まだ高校を卒業して間もなかった彼女は、ブルンジには無い平和学専攻コースで学ぶため、国境を越えてルワンダに来て、PIASSにとって初めての留学生になりました。その彼女が、大学内外で豊かな学びと経験を重ね、「非暴力による平和」のために働きたいとの思いを深めていったこと、そして、今後は同僚として働いてくれることに大きな喜びと希望を感じています。この素晴らしいことを実現し、「新しいこと」を初めてくださる神（旧約聖書 イザヤ書 43:19）に感謝し、期待しています。

今週末から約4週間、そのフロリアンさんと共に1都6県で活動報告や講演活動に従事します。1人でも多くの皆さまに、ルワンダで起きている



新しいことをお伝えするとともに、彼女と出会っていただけるように願っています。支援会のホームページやフェイスブックで報告・講演会に関する情報をお伝えしていきますので、どうぞ足をお運びください。

### 和解の現場に立ち会う

3月に放映されたNHKのドキュメンタリー《明日世界が終わるとしても「虐殺を越え”隣人”に戻るまで》》で紹介された、虐殺生存被害者であるサラビアナさんと加害者であるアンドレさん（ウブムエ38号参照）。あれから半年を経て、お二人の和解の現場に立ち会うことができました！

9月30日、雨期に入っていましたが大天候にも恵まれ、サラビアナさん宅の前の空き地に立っている数本の木の幹にナイロンシートを括り付けて屋根にし、近隣の家庭から借りてきたベンチを並べただけの特設会場で、その「謝罪と赦し」の集まりは開かれました。参加者は、ルガンド集落の養豚組合のメンバーとその親族を合わせた約40名。私は同僚のセルジさん、フロリアンさん、2名の日本人留学生と一緒にその集まりに陪席しました。

### アンドレさんの告白

午後3時頃、ブルーの背広を着たアンドレさんが立ち上がり、罪の告白が始まりました。彼のすぐ目の前にサラビアナさんと彼女の親族や友人たちが座っていました。ジェノサイド当時の様子を語り始めたアンドレさんの表情は堅く、緊張感からでしょう、心なしか体を震わせているように見えました。私は、祈るような気持ちで、いえ時折祈りながら、彼の言葉に耳を傾けました。

アンドレさんはまず、フツの村人たちが政府と軍に命令されて「ツチ狩り」に駆り立てられていた当時の様子に触れた後、捕えられたツチの人たちが集団で殺された「あの日」の出来事について語りました。ある男性が、命乞いするサラビアナさんの顔面にナタで一撃を加えたこと、倒れ込んだ彼女の頭部に再びナタが振り下ろされ、その時、頭を覆っていた彼女の手の指が切り落とされたことなど、生々しい証言でした。耳をふさぎなくなるような描写が続いた後、アンドレさんは、「あの時、もし私がナタを渡されていたら、きっと同じことをしたでしょう」と告白しました。

その後、アンドレさんは、今回直接サラビアナさんに謝罪をしようと決意した経緯と心境について説明しました。彼は長い間、裁判の場で謝罪し、仲間と一緒に「償いの家」を建てたことで十分だと思っていました。昨年4月、教会で開かれた集会でサベリアナさんに直接謝罪していなかった5人の仲間たちと一緒に謝罪もしました。しかし、今年1月に謝罪をテーマにしたセミナーに参加し、

自分がひとりの人間としてサラビアナさんの前で直接真実を語り、赦しを請うことから逃げていたことに気付いたのでした。

「1月のセミナーの後、カズからの問いかけを受け、サラビアナさんを直接訪ねて謝罪しようと決心しました。しかし、その後しばらくあの時の記憶が鮮明に思い出されるようになり、眠れぬ夜を何度も過ごしました。謝罪したいと思っても、なかなか心の準備が出来なかったのです」と、1月下旬、直接サラビアナさんを訪ねて謝罪することができるまでの葛藤について語りました。そして最後に、サラビアナさんに向かって「これから私はあなたの良い隣人として歩みます」と語りかけたのでした。

彼が自分もサラビアナさんの顔面にナタを振り下ろした男性と結局は同じなのだ、と告白するにはどれだけの勇気が必要だったことでしょうか。彼は1月下旬、私とセルジさんの立ち会いのもと彼女の家でそれを成し遂げ、今回は、自分の妻や子どもたち、そして友人たちを前であらためてそのことを告白したのです。

### 親族代表のスピーチ

その後、サラビアナさんの親族を代表してオーガスティンさんがアンドレさんの隣で応答のスピーチを始めました。オーガスティンさんは、「償いの家」を加害者たちに建ててもらった後、彼らと共にカブゾ集落にあるもう一つの養豚組合に参加している方です。

「サラビアナは、あの頃とても美しい娘だった。でもあれですべてが台無しになった。それを思うと赦すことはとても難しい…」彼は、時折アンドレさんに視線を向けながら、「赦すことの困難」について語りはじめました。その時、サラビアナさんを含め、何人かの人々が頭を垂れているのが見えました。重苦しい雰囲気あたりを包み込みました。

これからどんなことを語るのだろうと息を飲んだ瞬間、「アリコ」（「しかし」の意）という言葉が私の耳に入りました。それに続けてオーガスティ

ンさんは、「私はあなたが勇気を振り絞って罪を認め赦しを請うたことに感謝します…」と言ったのでした。そしてその後も私の予想と期待を越える言葉が続きました。「私たちには皆さんの謝罪を拒むことはできません。皆さんは、私たちにとって大切な存在だからです。私たちの子どもたちは花嫁や花婿を皆さんの子どもたちから見つけるのですから…」

彼のスピーチの中には社交辞令的な部分があったかもしれませんが。しかし、家族を殺し、自分をも殺そうとした加害者とその家族に向かって「あなたたちは私たちの家族なのです」、と彼が宣言したことに私は驚きました。そして、被害者と加害者という関係を越えて共に生きていく決意の言葉として受け止めたのでした。事実、これまでもご紹介したことがあるように、この村では被害者側と加害者側の子どもたちが愛し合い家族を作るといふ、以前は想像すらできなかつたことが現実になりはじめています。

### サラビアナさんの赦しのことば

オーガスティンさんが着席すると、サラビアナさんが前に進み出ました。彼女の左隣には友人のリディアさんがピッタリと付添い、腰に手を回して支えていました。そして、右隣に立つアンドレさんに語りかけるように話し始めました。彼女の表情から緊張と真剣さが伝わってきました。

最初に彼女は、繁みに隠れていたところを見つけ出され、ナタで顔面を切り付けられた「あの日」の出来事を詳細に語りました。自分を死んだと思った虐殺集団が去った後、頬から流れ出る血と混じって赤くなった水たまりの水を横たわったまま必死に飲んだこと。人目を忍びながら、二日ばかりで這うようにして自宅までたどり着いたこと。虐殺当時の地獄図を垣間見せる証言の後、彼女はアンドレさんにこう尋ねました。「これは以前あなたに尋ねたことですが、もう一度聞きます。もし私があの時死んでいたとしても、あなたは私の親族に謝罪しますか?」。彼女は再び、アンドレさん



がどれだけ真実に自分のしたことを悔いているのかと問いかけたのです。その問いかけにアンドレさんは、「します」ときっぱりと答えました。

そして、昨年4月にアンドレさんが他の加害者たちと一緒にした謝罪には真剣さが感じられなかったことを率直に語りました。彼女は中途半端な謝罪が彼女の心に響かなかっただけでなく、彼の心の癒しにとっても十分なものではなかつたはずだと話し、その後こう語りかけました。「あなたを赦したことは既に伝えた通りです。でももう一度言います。私は心からあなたを赦しました。」そして最後に、「これからは勝手口から我が家に入りしてもいいですよ」（「これから家族のように気軽に家を訪ねてください」の意）とのユーモアに富む言葉を付け加え、アンドレさんの告白への応答を終えたのでした。

### 続く赦しへの誘い

集いの終盤、オーガスティンを含め、サラビアナさんの親族数名がそこにいた加害者に向けてメッセージを語りかけました。彼らが口々に言っていたことが三つありました。一つ目は、この日を実現してくださった神様への感謝。二つ目は、勇気を持って真実を告白したアンドレさんへの感謝。三つ目は、まだ真実を語らず謝罪していない加害者への「赦しへの誘い」のメッセージでした。「アンドレさんに続き勇気を持って真実を告白してください。私たちにはあなたたちを赦す準備ができています」との言葉は、私がサラビアナさんに出

会った7年前以来、彼女が何度となく加害者たちに向けて語りかけてきたメッセージなのでした。

翌朝の日曜日、私はルカンド集落やカブゾ集落の人たちが集うカトリック教会のミサに参加しました。赤ちゃんからお年寄りまで、あらゆる年齢層の、500以上の人々で聖堂が一杯になっていました。私はそこで、23年前には殺す側と殺される側で分かれていた両方の人々が集い、共に神を賛美しているという事実によって圧倒されました。

そのミサの最初にエゼキエル書33章11節が読み上げられました。「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たち

の悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。」

この言葉が読み上げられた時、私の胸の中で熱いものが込み上げてきました。実はこの聖書の箇所は、2006年11月、「償いの家造り」を開始する以前のこと、私がREACHの仲間たちと共に虐殺加害者を対象にした学習会のテーマとして選んだものでした。その時の参加者の多くは今も養豚組合のメンバーであり、そのミサにも参加していました。どんなに大きな罪を犯した人間でも「立ち帰って生きよ」と呼びかけてくださる神。その恵みと赦しの言葉を、キレへの人々と共に聴くことができ、忘れ得ぬ朝になりました。

## 平和を学び生きる

### フロリアン・ニュンゲコ

プロテスタント人文社会科学大学平和紛争研究学科にとって初めての留学生。11月からPIASS「平和と開発センター」の平和プログラム担当職員に就任。

#### ブルンジ共和国 Republic of Burundi

- 1 面積 2.78万平方キロメートル
- 2 人口 1,050万人(2014年, 世銀)
- 3 首都 ブジュンブラ (Bujumbura)
- 4 民族 フツ, ツチ, トウワ
- 5 言語 仏語(公用語), キルンジ語(公用語)
- 6 宗教 カトリック, プロテスタント



(地図・国旗・一般情報は外務省ホームページより)



「支援する会」の皆さま、こんにちは。私は三日後の10月26日、PIASSの平和紛争研究学科を卒業します。2013年10月、入学当時の私はまだ19歳でした。知人の大学教授から紹介されたことがきっかけでしたが、ブルンジの大学にはない平和学コースでぜひ学びたいと思い、ルワンダ留学を決意しました。フランス語圏であるブルンジから来た私は、何よりもまず英語力を向上させること、そして、ルワンダでの生

活に適応する必要がありました。

PIASS では主に、私の国やアフリカ大湖地域にとって必要な平和構築の諸理論を学びました。特に、非暴力、紛争解決、交渉と仲裁、トラウマからの癒し、そして和解に関する授業がとても印象に残っています。課外活動では主に、学生団体ピースクラブの活動に 2013 年の創設当初から関わってきました。その中でも特に、コンゴ民主共和国東部やウガンダ北部へのスタディツアーを実施したり、平和構築の実務家の方々を招待してセミナーを開催したことがとても良い思い出です。その他、ニャンザ郡やキレヘ郡の「和解グループ」(ジェノサイドの生存被害者と加害者、またその家族が助け合うグループ)と交流したり、複数の NGO の活動にボランティアとして参加し、紛争転換、仲裁、批判的思考などに関するワークショップのファシリテーターをさせていただくなど、思い起こすと本当に貴重な経験を積ませていただきました。

私がこの4年間に学んだこと、経験したことは多岐に渡りますが、その中でも以下の二つのことが最も重要なものであったと思います。その第一は、国際的な人々の輪の中で過ごせたことにより、様々なものの見方・考え方や異なる現実にオープンな姿勢でいることができるようになったことです。これまでアフリカ、ヨーロッパ、アジア、北米といった地球の様々な場所からやってきた若者たちと出会いました。特に PIASS の中ではブルンジ人、ルワンダ人、コンゴ人、南スーダン人、タンザニア人、そして日本人の学生たちと親しい友達になりました。これらの数々の出会いと経験により異文化間コミュニケーションの能力を向上できたと同時に、平和構築が異なった状況においても共通の課題であり、より良い解決を導くためには様々な人々の協力が必要であることを体験的に学ぶことができました。

第二は、異なる「和解グループ」との交流や



活動支援に参加した経験から、「和解」に深い関心を持つようになったことです。学部生の集大成である卒業論文では、現地調査にもとづき、「和解の実際：ルワンダにおける赦しの実践の理解 - NGO の和解活動に参加するジェノサイド加害者と被害者の事例から」をまとめました。私はこの研究に6ヶ月を費やしましたが、調査の中で自らの赦しと和解の経験を分かち合ってくださった方々から多くのことを学びました。その方々から聴き取ったことを形にして伝えることができたことをとても嬉しく思います。

これら全ての経験を通し、私はまずこのアフリカ大湖地域や世界中で平和の実現を妨げていることが何であるあるかに気づくことができました。また同時に、多種多様な人々との交流を通して、平和を築く様々な機会があることを学びました。私は今後、アフリカ大湖地域の持続的な平和の実現に向けた取組みが広がるように、またそのために必要である組織的な取組みが定着していくように、様々な人や組織と繋がっていきたく願っています。そしてまた、学術的な知見にもとづいた平和構築への貢献ができるように研究を続けたていきたいです。

私はアフリカ大湖地域出身の若者として、これまでお話したすべての平和構築の経験を通して大きく成長しました。そして今、これからの出会いや経験について思いめぐらせながらワクワクしています。

最後に、私の祖国ブルンジのことをお話して終わります。ブルンジでは2015年の4月末、現大統領が三選を目指したことに対する反対運

動に端を發した政治危機が続いています。これまでに500名以上が死亡し、近隣諸国に難民として流出した人々の数は50万人に上ります。今この時も多くの人々が逮捕・拘束されています。

ブルンジでは独立から3年後の1965年以来、暴力紛争が繰り返されてきましたが、私自身はその直接的な被害を受けたことはありません。しかし私は、暴力がもたらす様々な悪影響を目の当たりにしながら育ちました。私はブルンジで起きている暴力の原因、そして同時にその結果として増幅しているものは「恐怖心」だと思います。私の同胞の多くは、民族的な要因と政治的な要因から焚き付けられている恐怖心の中で生きているのです。

多くの人々は、「他者」（民族的出自や、政治的背景が自分とは違っている人々）が諸悪の根源だと信じ込んでいます。しかし実際には、ほとんどの人々は自分たち側に起きた被害だけを

聞かされ、「他者」がどれだけ自分たちと違い、また邪悪な存在なのかと吹き込まれてきたのです。もちろんこのこと以外にも暴力の原因と結果として大切な要因があります。しかし、私が強調したいのは、恐怖心こそが最も深刻な暴力の原因であり結果であるという事実には多くの人は気付いていないということなのです。

私がまだ高校生頃の頃、近所に住む軍人出身の男性が私の両親との対話のなかで語った言葉を思い起こします。その男性は、「私は他の民族の出身者から命を救ってもらったことがあります。同時に私は戦闘の中で、他の民族の人たちを何度も保護しました」、という言葉です。私はこのような物語をもっとブルンジの中で聞くことができたらと願っています。それは、物事を決めつけて行動するのではなく、分断線を踏み越え、真の人間になることを選んだ人々の物語です。私自身、今、そのような物語を自分の人生の中で紡ぎ語り続けていく責任を感じています。

## アン・ディートリッヒ

## 発見と学びの刺激的な旅のはじまり

2016年11月にドイツ市民平和奉仕帯から派遣され、「平和と開発センター」の平和構築アドバイザーとして勤務。

私は2005年から昨年まで、ドイツ国際協力公社(GIZ)の一部門であるドイツ市民平和奉仕隊 (German Civil Peace Service) のメンバーとして、スーダンとエチオピアで働いてきました。アフリカで最も小さい国の一つであり、私が生まれ育ったドイツと似たような痛ましい歴史を持つルワンダに赴任する機会が与えられたとき、新たな場所できっと新しいことを学べるに違いないと確信しました。PIASSの「平和と開発センター」(以下「センター」)への配属が決まった時、私はいくらかの緊張を感じましたが、同時にどのようなことが私を待っているのか期待で胸が膨らみました。

赴任する前、センターの活動についてあまり詳しい情報がありませんでしたが、私の上司から送られてき

た資料から、日本人とルワンダ人の同僚がいて、学生たちが参加できる平和構築活動の立ち上げに着手していることが分かりました。ルワンダ到着後、直接佐々木さんとお会いし、私と佐々木さんの間にはいくつかの共通点があることが分かりました。一つ目は、エチオピアで働いた経験があること。二つ目は、非暴力による紛争転換(Nonviolent Conflict Transformation)の重要性がより認知され、実践されるように献身してきことです。その後、佐々木さんやセルジさん、そしてPIASSの他の教職員とお話をする機会を持つ中で、この仕事はきっと平和構築アドバイザーとしての私のキャリアの中で最もやりがいのあるものの一つになるだろうと感じました。今年の2月には開発学部の教員

の皆さんとドイツ市民平和奉仕隊のルワンダ事務所長が一同に会し、二日間泊りがけて今後二年間の協力関係について協議し、活動計画を立てました。

11月にセンターで働き始めてから約1年になりますが、私はこれまで参加してきた活動に深い感銘を受けています。ルワンダでは虐殺の被害者と加害者が共存して生活し、彼らの多くが23年が経った今でも、真実についての相互理解に至ることができていません。また実際に何が起きたのかを安心して話せる場所がない人々や、国家や宗教的な権威から罪を告白するように、あるいは加害者を赦すように強いられていると感じている人々も少なくありません。このような不安定な状況の中で、ジェノサイドの被害者側の人々と加害者側の人々の癒しと関係修復を支援する活動は、地道ですがとても大切なものです。

ピースクラブに所属する学生たちは、ニャンザで切り花づくりに取り組んできたウムチョ・ニャンザ（虐殺生存被害者の女性たちと加害者を夫に持つ女性たちの協働グループ）の女性たちを度々訪問し、農作業を手伝ったり、彼女たちが進めてきた和解と共生への歩みについて話を聴くなどの活動を続けてきました。また最近の新しい動きとして、佐々木恵さんが始めて下さった、女性たちの所得創出を目的としたクラフト作りのお手伝いをする活動が始まりました。このような活動は、まだまだ生活が苦しい女性たちに具体的な助けの手を差し伸べるということに留まらず、参加する学生たちにとって、平和構築の実際に触れるとても良い実地研修の場になっているのです。

学生たちやNGO職員を対象にした平和構築トレーニングを進めていくこともセンターの重要な働きですが、私はその中でも特に「暴力に代わる手だてプロジェクト」(the Alternatives to Violence Project、略称AVP。詳しくは[www.avp.international](http://www.avp.international)を参照)の推進に深く関わっています。AVPは、参加者が怒りのような強い感情を制御し、紛争解決に向けての建設的かつ非暴力的な方法を通して、潜在的に暴力的な状況を転換する能力を養うためのトレーニングです。

平和紛争研究学科では過去4年間、同僚のペニーナ教授がトレーナーになり、AVPの初級と上級のワーク



ショップを実施してきましたが、私がセンターの働きに加わってからもその取り組みを続け、10月には初めてトレーナー養成ワークショップを実施しました。

今回のワークショップには現役の学生10名、NGO等に就職している歴代の卒業生4名、協力関係にある援助機関職員2名の計16名が参加し、全員が無事に「見習いトレーナー」として働き始めるのに必要な全課程を修了しました。私はAVPワークショップの参加者たちが、自尊心や建設的に意思疎通をはかり協力する能力、そして非暴力的な方法で紛争に対処する勇敢さや独創性を向上していくことを目の当たりにして、大きなやりがいを感じています。

物事が予測できたり安全にできるというのはありがたいことには違いありません。しかし、私は多様性や柔軟性に対処し、新たな探求に参加できることをとても素晴らしいことだと感じています。PIASSではこれらすべてが同時に求められます。決められていた行事や授業の日程が変更になることはよくあることですし、新しい講師や学生たちがやってきますし、去っていく人たちもいます。また、次々に新たなプロジェクトや業務が生まれていきます。私は、この働きに加わってから1日たりとも退屈に思ったことはありません。毎朝、感謝の気持ちから笑みを浮かべて出勤するほどに、この職場での仕事を楽しんでいるのです。

間もなく同僚たちと一緒に新年度の計画を立てることになっています。新年度はおそらく、平和構築の技能に関する授業、AVPトレーニング、ピース・クラブとの共同事業、ドイツ市民平和奉仕隊の他の協力機関へのサポート、そして、ニャンザで行なっているような草の根のプロジェクトに関わっていくことになるでしょう。今からそれら一つ一つのことをとても楽しみにしています。

## 事務局からのお知らせ

- 佐々木和之さんの今年の帰国は、11月6日～12月4日です。各地でおこなわれる報告集会へ、ぜひ、ご参加ください。入場無料。
- 今年3月にNHK BS-1で放映された佐々木和之さんのドキュメンタリー番組「明日世界が終わるとして」のDVDを貸出中。事務局の洋光台キリスト教会（蛭川明男牧師）TEL 045-774-9861にお申込み下さい。
- 佐々木さんを支援する会主催「ルワンダ第3回、和解の現場・訪問ツアー」を2019年9月初旬におこないます。虐殺の現場を訪ね、その悲劇を心に刻みつつ、佐々木さんの活動現場を訪問します。ぜひ、今からご検討ください。詳細は、今後ウブムエ等で紹介いたします。
- 第二回「平和と和解・宣教フォーラム」を2017年11月17-18日、静岡県でおこないます。多数のお申し込みをありがとうございました。

## 帰国報告集会 2017のご案内

### 報告集会 in 沖縄

2017年11月12日（日） 15:00-17:00 会場：那覇バプテスト教会  
沖縄県西原町字幸地 1029-1 電話 098-944-5331 牧師 城倉 翼

### 報告集会 in 横浜

2017年11月19日（日） 14:30-16:30 会場：洋光台キリスト教会  
横浜市磯子区栗木 1-22-3 電話 045-774-9861 牧師 萩原永子、蛭川明男

### 報告集会 in 福岡

2017年11月26日（日） 15:00-17:00 会場：姪浜バプテスト教会  
福岡市西区姪の浜 4-22-9 電話 092-881-0383 牧師 鈴木牧人

### 報告集会 in 鹿児島

2017年12月3日（日） 14:00-16:00 会場：日本バプテスト鹿児島キリスト教会  
鹿児島市鴨池 2-23-17 電話 099-254-0532 牧師 田淵 亮

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ）

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能です。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 加藤 誠（大井教会牧師）、中條智子（長住教会牧師）、播磨 聡（広島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、米本裕見子（日本バプテスト女性連合幹事）